琉球大学学術リポジトリ

思春期の特徴を踏まえた美術科の授業改善
―生徒自身が表現力を引き出す環境づくり―

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 織恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017994

思春期の特徴を踏まえた美術科の授業改善

―生徒自身が表現力を引き出す環境づくり―

Improving Art Classes Based on the Adolescent Characteristics:
Creating an Environment Where Students Can Bring Out Their Expressiveness

酒井　織恵
Orie SAKAI

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・琉球大学教育学部附属中学校

１．　テーマ設定の理由

⑴ 中学校の美術科が目指すもの

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）によると，教科の目標は「造形的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成すること」で，生活や社会の中で美術と関わる力を育むことである。その目標にさらに続く「⑶美術の創造活動の喜びを味わい，美術を愛好する心情を育み，感性を豊かにし，心豊かな生活を創造していく態度を養い，豊かな情操を培う」には，「喜び，心情，感性，情操」等の感性に関する事柄が掲げられている。

このような芸術系ならではの「感性」に関する目標がある美術の授業が学校教育にあえて存在していることは，学校教育において生徒の感性を豊かに育むことが重要であることを意味しており，この教科の授業者は重要な役割を担っていると言えるだろう。

⑵ 美術の学びを自覚できない生徒と，導き方が分からない授業者

しかしながら，筆者による質問紙調査によると，中学生の中には美術が好きでないと感じ，美術の学びは大切だと思わない生徒が少なからずいることがわかった。好きでない理由として「絵がうまくないから，下手だから」等が多く，美術の学びは大切だと思うかについては「将来使えるかわからない。大人になってから使う気がしない」等の意見があり，美術科による学びの意義や価値を実感できない生徒がいることがわかった。

それ以上に課題と感じたのは,そのような生徒を目前にして何もできない筆者がいたことである。美術教師として学習指導要領で示された目標にどのように生徒を導けばよいのか困惑することも多く，美術の学びを受け取れない生徒のためにも，筆者自身の授業改善が必要だと感じた。

⑶ 先行研究が示す思春期の生徒像

思春期の子どもが遭遇する造形表現上の危機に対し Johnstone（1941=1958）は,「思春期の段階の子どもは内的な感情の動揺に圧倒されてしまうため，表現形式に変容が始まるのは避けがたいことであるが，個の変容は決して創造の意欲が衰え去ったのではなく，むしろ肉体が大人になっている時期は創造の能力が芽生え始めている時期なのである」と述べている。また,「その時期の教師の正しい配慮と理解ある指導があるなら，彼らは創造の意欲をよろこんで満たしつつ，自分の感情の困惑に打ち克つ手段を獲得できるだろう」とも指摘している。つまり，思春期の段階の子どもは，意欲が低下したように見えてもそれは表面的な様子に過ぎず，発達段階を踏まえた配慮と適切な指導があれば意欲的に創造活動を行うというのだ。

では，ジョンストンがいう「正しい配慮と理解ある指導」とは，現在の学校教育においてどのようなものなのか。学習指導要領が示す美術科の目標に添って,授業改善ができないか考えてみたい。

２．「思春期」という概念

本稿では中学生をより理解するために，思春期という視点からその特徴を捉えていきたい。

⑴ 思春期の脳発達と自己制御

脳科学から見た思春期の特徴として，自己制御が挙げられる。小池（2015）は自己制御について，現実を客観化し，未来の自分を想像しながら，その目標にそぐわない行動を抑制し，現時点で取りうる最良の選択を実行していく一連の流れをいい，思春期前後から発達し始める前頭葉機能とも密接な関連があるとしている。つまり思春期は，前頭葉の発達に伴い，より長期的で抽象的な目標を内発的な動機づけによって行えるようになる特徴があると言える。

⑵ 第二次性徴が起こす心身の変化

第二次性徴は，性ホルモンの急激な分泌によって起こり，心身ともに大きく変化していく。第二次性徴の始まりについて小池（2015）は，発情期の始まりに相当し，異性に注目し，同性と競争したり協働したりする。自分の外見や行動評価が気になり，また親の庇護から離れようとし友人との結びつきが強くなると述べている。

このような脳発達と自己制御，性ホルモンと第二次性徴の関係を踏まえることで，思春期をむかえた中学校１年生から３年生の生徒への適切な指導が見えてくるのではないかと考える。

３．研究の目的

本研究では，思春期の特徴を踏まえた授業改善により，中学生が美術科の学びの意義や価値を実感できることを明らかにしたい。

４．研究の方法

⑴ 質問紙から見えてくる生徒の実態

本研究は３学年の生徒を中心に行う。筆者は彼らが１年生の時に授業を担当し，１年間を開けて再度指導をすることになった。そのような３年生 150 名に対して，美術科の学びをどのように考えているかを知るために以下のような質問紙調査を４月に行った（表１）。

表１　美術の授業に対するアンケート（３年生）

No,	質問	選択肢１	選択肢２	選択肢３	選択肢４
Q3	小学校の図工と今の美術の授業を比べて，授業中の気持ちに違いはありますか？	全く同じ気持ち 9.3%	ほとんど同じ気持ち 35.3%	違う気持ち 50.7%	とても違う気持ち 4.7%
Q4	美術の授業を楽しむために，必要なことは何だと思いますか？	もっと先生に褒めてもらう 0%	もっと友達に褒めてもらう 35.3%	もっと学習の意味を知る 44%	他 32%

⑵ 小学校の図工と中学校の美術の時間の違い

その結果，小学校の図工の時間が楽しかったと答えたのは，どちらかというと楽しかったも含めると 86%に上り，ほとんどの生徒がおおむね楽しかったと考えている。しかし，中学校での美術の時間については両方を合わせると 84%と高いが，「楽しい」は約半数に減り，「どちらかというと楽しい」の方が２倍に増えている。このことから，中学生は美術の時間について単純に「楽しい」と思っているというよりも，「どちらかというと楽しい」という思いに変化していることになる。

では，その理由は何であろうか。それを探るために，Q3 の「小学校の図工と今の美術の授業を比

べて，授業中の気持ちに違いはありますか？という質問に対する記述の回答をテキストマイニングで解析してみた（図１）。一番大きな文字となった「楽しい」という形容詞は，実際の記述の中には「小学校の時は楽しかったけど」や「楽しくなくなった」などにも使われていることから，単に「美術や図工の授業が楽しい」という回答とは捉えにくい。また，次に出現頻度が高い「美術」「小学校」「図工」「中学校」「中学生」「つくる」や，質問の中にある「気持ち」などは，文脈上使用頻度が高い単語として捉えていいだろう。それらの単語を除いていくと次に使用頻度が高い単語として「成績」が入っている。このことから，小学校の図工の時間と中学校の美術の時間の気持ちの違いに「成績」が関連している可能性がある。この結果は，前述した第二次性徴期の特徴である「自分の外見や行動評価が気になる」思春期の姿と関連性があるだろう。

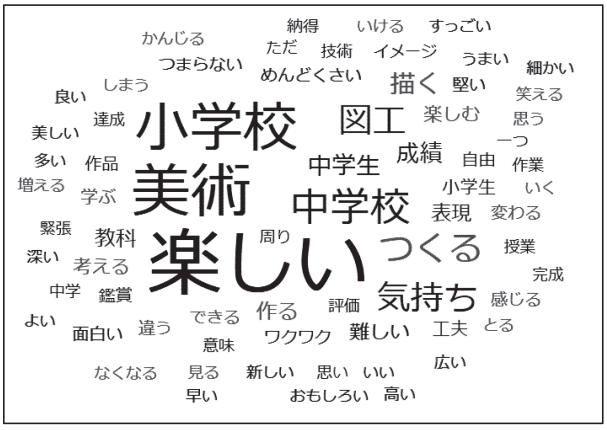


図１　Q3 のテキストマイニングによる解析

⑶ 友達との関係性

また，今後の授業改善に向けての質問でもある Q4 の中に，「もっと先生に褒めてもらう」の選択肢を置いたが，残念ながら選択者は０人であった。しかしこの項目の自由記述をテキストマイニングで解析してみると，印象的な結果となった（図２）。「褒める」という動詞が最も多く使われていたのだ。「先生に褒めてもらう」の選択者は０人だったことから，友達から褒められることに対する期待ととれる。このような思いは，前述した第二次性徴期の特徴である「親の庇護から離れようとし友人との結びつきが強くなる」思春期の姿と関連性があるだろう。

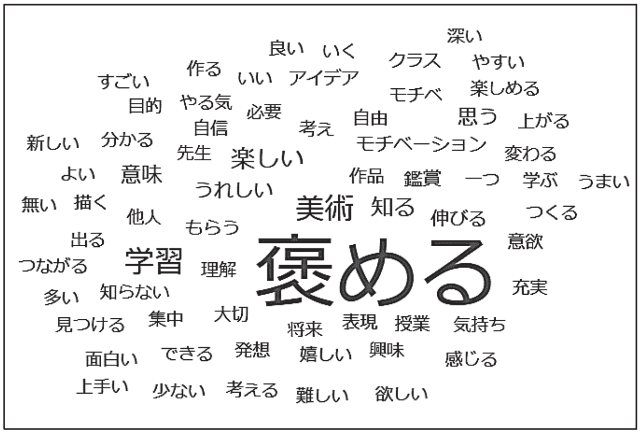


図２　Q4 のテキストマイニングによる解析

⑷ 学習の意味を知りたいと考える中学生

筆者が，Q4「美術の授業を楽しむために，必要なことは何だと思いますか？」の問いに，「もっと学習の意味を知る」という選択肢を入れたのは，生徒は美術科の学びをどのように考えているのか知りたかったからである。結果は，44%の生徒が「学習の意味を知りたい」と答えており，３つの選択肢の中で一番高くなった。このことは，前述した思春期の脳発達の特徴である，より長期的で抽象的な行動をとれるようになるという姿と関連性があるだろう。笠井（2015）は，思春期は脳と精神機能の発達にともない，将来の自分のイメージについてのメタ認知と言語化を可能とし，それは夢や希望と呼ばれるものの源になると述べている。つまり，思春期は学びの意味を知ることで長期的な展望をもって前向きに取り組むことが可能であるということである。これまで筆者は，美術の学びに意欲的でない生徒に対し無力感のようなものを感じていたが，実際には生徒はその学びが自分に必要だと感じたら自ら学ぼうとするということになる。そうであるならば，そこを意識した授業改善が必要となる。

⑸ 中学生の学びに必要なものとは

以上のことから，授業改善に必要なポイントは以下の３点だと考えられる。①成績・評価を気にせず学びに向える授業，②友達との結びつきを大切にした授業，③学習の意味が分かる授業，である。次に，その３点を踏まえた授業実践について述べる。

５．授業実践

⑴ 年間目標の決め方と生徒への提示

新学期に行われる教科開きは生徒が集中して耳を傾けるため，教科経営としての方向性を示すには絶好の機会と言える。今年度は授業改善が筆者の重要な課題であったことから，その準備を入念に行うことにした。まず初めに，４月２日に非常勤講師との教科会において年間を貫く評価基準についてのミーティングを行った。今年度の非常勤講師は，３月に教育学部を卒業したばかりの教師１年目である。現場経験は無いものの，美術教育に意欲的である。この教科会において筆者には学習指導要領に添った今年度の美術科の目標（３つの観点）を決める狙いがあったが，自然な対話の中で出したかったので非常勤講師にはそれを伏せ，筆者が質問する形で進めた（表２）。

表２　４月２日の教科会の対話

	筆者	非常勤講師
1	自身が中学校２年生くらいの時，どんな気持ちで学校生活を送っていた？	１年過して，余裕がありました。美術は得意だったけど，自分よりうまいと嫉妬していました。あと，全体的に部活中心で野球がうまくなりたい一心で，高校野球したいって思っていました。
2	美術の授業に対してどう思っていた？	美術の授業に対する向上心とかはないですね。何も考えずにやって，休憩とか作業みたいな感じで眠くならない授業。意味は考えないけど「早く終わらないかな～」とは思わない。やっぱり集中していたかも。ひたすらやる。無の時間で心地よい。リセットされる感じでした。
3	その時間って，どんな意味があった？	無の時間は，価値があったと思います。リセットされて，その時間は我に返るような。で，現実にもどる。現実から逃げるというよりは現実を豊かに受け止められるようになる感じですね。
4	授業中，やっぱり褒められたかった？	褒められたかったですね。注目されたり。特に，友達から褒められるとめっちゃうれしかった。褒められ方も大事で，自分が褒められたい方法とか量が自分の希望と一致しているとさらに嬉しい。そしたら，やりがいを感じるし，授業の価値が上がる感じです。
5	改めて，授業で大事にしたいことは？	なんか，外から入れるのではなくて中から出す感じがいいですね。外から加えると自分のことじゃないみたいに感じます。それよりは，すでにある知識とかやったことがある方法をどう使うかが大事かなと思います。

以上のような，対話で出てきた言葉やイメージを学習指導要領と対比させて年間目標を整理したところ，授業者としてもわかりやすく生徒にも説明がしやすい文言となった（表３）。

表３　令和３年度　本校美術科の年間目標（学習指導要領との対比）

観点	学習指導要領	今年度の目標（生徒に示す内容）
知識及び技能	対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに，表現方法を創意工夫し，造形的に表すことができるようにする。	表現するために，身近にあるものを活用する ・自分のアイデアやひらめきを表現するために，身近にある道具・材料など既存のものを活用する
思考力 判断力 表現力	造形的なよさや美しさ，表現の意図と工夫，美術の働きなどについて考え，主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり，美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。	自分の中にあるものを表現する ・外から付け足すのではなく，自分の中にあるものを表現する
主体的に学習に取り組む態度	美術の創造活動の喜びを味わい，美術を愛好する心情を育み，感性を豊かにし，心豊かな生活を創造していく態度を養い，豊かな情操を培う。	没頭して，心をリセット ・没頭して日常から距離をとり，心をリセットする。リセットすることで日常を豊かなに生きるパワーをチャージする

今年度は，この年間目標をすべての題材の目標に関連させて示し，同時にこの目標を評価基準とすることにした。具体的には毎回の授業で「題材の目標」を板書し，ワークシートの評価や振り返りや自己評価においてもこの目標に添った形で行う。そうすることで，生徒は目標を見失わず，授業者は指導方法や評価基準に一貫性を持たせることができると考え，４月の教科開きでは全学年の生徒に説明を行った。生徒は授業開き際のワークシートに「目標がわかったので，がんばろうと思う」「目標とか評価の話が聞けてよかった」などと記入しており，一定の理解に繋がったと思う。

⑵ 表現力を引き出す教材「ライブドローイング」

授業中，評価を気にして表現活動を躊躇してしまう生徒がいるが，学習指導要領で示された資質・能力を育成するためにも，幅広い表現活動は重要である。筆者自身も，教材を「具体物の表現」にした授業を行うと生徒の中に「似ている」「似ていない」の意識が生まれ，それを気にすることで表現力を出せずにいる姿を多く見てきた。生徒が幅広い表現活動するために教材を「抽象的な表現」にすることで，表現しやすくなるのではないかと考えた。そこで，抽象的な表現でより表現力を引き出しやすくする「ライブドローイング」という教材を考案した（図３）。この名称は，授業中に生徒とのやり取りから自然に使われた言い方である。以下に，この教材が生まれた背景と名称に込めた意図を示す。

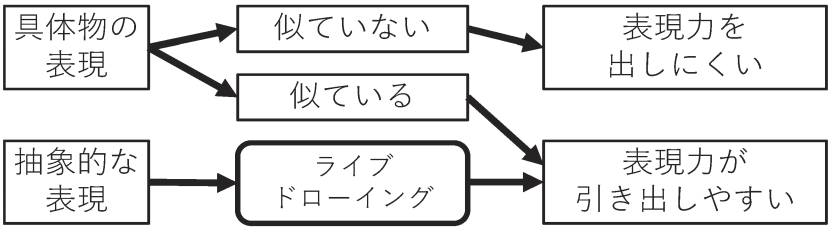


図３「ライブドローイング」考案の発想

① ライブドローイングが生まれた背景と名称に込めた意図

２月の課題発見実習で県内公立中学校の２年生を対象に行った授業では，生徒の内的な想像力を引き出すことをねらいとした。筆者はその際の説明を「子どもの頃に描いていたような絵」とか「今の気持ちを表現しよう」などの指示をした。すると，子どもの頃に描いていたアニメのキャラクターを嬉々として描く生徒や，「感情とか，別にないし…」と描くことに抵抗を示す生徒がほとんどで，筆者が予想したような作品は描かれなかった。そこで，検討を重ねて授業改善を行った。まず，「具体的なものを描かない」という条件や鉛筆という画材の特徴を示し，点・線・面を描くよう指示をした。また，名称を当初の「いたずら描き」から「ライブドローイング」に変更した。ドローイングとは表現方法のひとつで，素描，デッサン（フランス語：dessin），と並んで物体の形体，明暗などを平面に描画する美術の制作技法，過程，あるいは作品のことである。最近ではコンピューター表現の技法も意味するが，ここで言う「ライブドローイング」とは，今描いた点・線・面から次に描くものを繋げていくような，「今を描く」「今の連続の表現」という意図を持たせた。

条件を加え，画材の特徴を示し名称を変えたことで，生徒の学習内容に対する理解が深まり，時間いっぱいに描く姿が見られた。振り返りシートにも「前の授業よりも楽しめた」「迷いがなくなった」等の感想が見られ，初めの作品と比較しても多くの生徒が抽象的な表現を楽しんでいる様子がうかがえた（図４）。

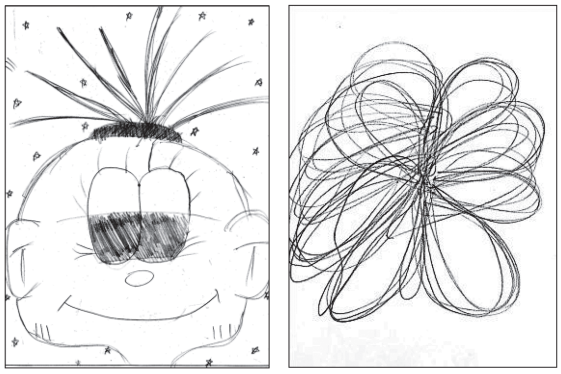


図４　Ａさんの作品の変化（左から右）

② ポスターカラーを使った取り組み

この授業に手ごたえを感じ，４月から勤務校でも取り入れた。１年生の授業では，まずカッターで削った鉛筆を用いて描き，次に真新しいポスターカラーを使って描いた。ポスターカラーでの取り組みでは，パレットの小窓に 12 色すべての色を小豆ほどの量を取り出すなどしてパレットの使い方と併せて指導したところ，鮮やかで伸びやかな作品が多く生まれた（図５）。試しに，美術室に常設している大型スクリーンに書画カメラを使って全員の作品を写し出すと，生徒は食い入るように見ていた。このように，自らが生み出した作品によって豊かな時間を味わうことで，生活の中の美術と豊かに関わる資質・能力の育成につながることを期待したい。

図５　ポスターカラーを使ったライブドローイング

⑶ 自画像で行った授業改善

① 目標設定の工夫

３年生は年度初めから受験を意識している生徒が多いが，筆者としては生徒が評価を気にしすぎることなく，のびのびと表現をして欲しいという思いで授業改善に取り組むことにした。

４月当初の題材を「自画像」に設定したのは，この時期に自分と向き合うことは 15 歳で迎える人生の分岐点の支えになるのではという思いがあるからだ。しかし，生徒にとっては「具体的に描くもの」であり，しかも自分の顔である。ただでさえ他者の評価を強く意識するこの時期の題材としては，生徒にとっては高いハードルと感じることが予想された。よって，そのハードルに柔軟性を持たせることにした。具体的には，題材の目標に「似せて描く」などの文言は一切含まないなどとし，生徒が理解しやすいような短い言葉で，年間目標とも紐づけするかたちで設定した（表４）。

表４　本校美術科の年間目標と「自画像」の授業目標

観点	今年度の目標（生徒に示す内容）	「自画像」の授業目標
知識及び技能	表現するために，身近にあるものを活用する ・自分のアイデアやひらめきを表現するために，身近にある道具・材料など既存のものを活用する	画材の工夫をする
思考力，判断力，表現力	自分の中にあるものを表現する ・外から付け足すのではなく，自分の中にあるものを表現する	表したいことを自分の中から引き出す
主体的に学習に取り組む態度	没頭して，心をリセット ・没頭して日常から距離をとり，心をリセットする。リセットすることで日常を豊かなに生きるパワーをチャージする	授業に没頭して元気になる

② 生徒の不安を踏まえた制作の条件

生徒の中には自画像に取り組むことを知った瞬間に不安な表情を見せる者もいたので，彼らの不安を払拭するために条件を提示した。昨今はコロナ禍で学校生活でも一日中マスクをつけており，授業中にマスクを外して自画像を描くことは躊躇される。それを逆手にとって一つ目の条件を「マスクをつけた顔を描く」とした。マスクを描くということは口や鼻を描かないということになるので描画を苦手とする生徒にとっては不安が軽減されるであろう。また，二つ目の条件として，「目をひとつ以上描く」とした。言い換えれば，「ひとつでもいい」ということで，背景や画材の工夫で，

目標に向かうことは十分できると考えたからだ。また，選択肢として自分の姿にできるだけ近い表現をしたい生徒には，写真を撮ってトレースをしてもよいことにした。

③ ワークシートの評価のスピード化と再提出可能な環境

評価されることに不安を覚える生徒にとって，提出したワークシートの評価がわからない状態はさらに不安を強くすることになるだろう。そのため，ワークシートの評価と返却をスピーディーに行い，返却後の再提出も可能とした。また，再提出の期限も設けなかったため制作が終わってから再提出をした生徒もいたが，できる限り対応した。このような環境を整えたことで自分の考えを自分のペースで深めていく様子が見られたことから，今後も継続したい取り組みである。

④ 「作品」と「制作日記」を一体型に

筆者はこれまで，作品と「制作日記（振り返りシート）」を別々に回収していたが，今回の支持体がコルクボードであったことから，裏面に OPP 素材のビニール袋を張り付け，そこに「制作日記」を入れて一体型にした。そうすることにより，作品の変容や工夫を制作日記の記述から瞬時に知ることができ，次の指導に生かすことが容易になった。

⑤ 個々の生徒の困り感に添った対応

目標設定や制作の条件を整えても，制作への戸惑いは個々によって違う。生徒 B は美術の授業が嫌いではないが，美術科の目標に向かって学びを深めているとは言えない生徒だった。画面を見つめてなかなか手を動かさないが，何かを考えているようにも見えたので声をかけると「背景をどう描いていいかわからない」と困り感を持っていることがわかった。そこで，授業の導入時に描いた「ライブドローイング」を背景に描いてみてはどうかと提案したところ，それならできそうだとすぐにとりかかった。その後の制作は順調に進み（図６），振り返りには「さいしょはえがなかったけど，あとからできてきた」，「とても楽しかったです」という感想を記述している。

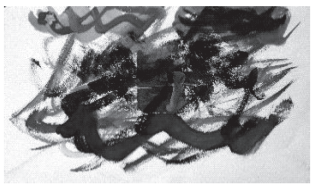
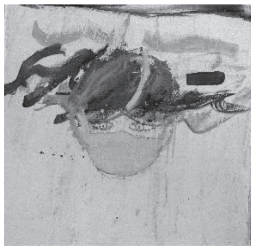
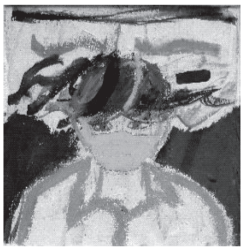
日	4/26	6/21	6/28	7/12（完成）
作品				
記述	（ライブドローイングの作品）	かみのいろをかくのはむずかしかった	いろとりどりになってきた	自分のえともういっかいむきあった

図６　生徒 B の制作の過程

⑥ 友達との結びつきを大切にした鑑賞会

また，完成後に添付する「振り返り＋キャプション」に友達の作品についてコメントできる箇所を作り，お互いの作品を鑑賞した後に印象的な作品を 3 点挙げてコメントを記入してもらった。その後の点検時に試しに集計を取ってみたところ，40 人ほどのクラスの中で 12～18 名の友達の票を集めている生徒がいることがわかった。中学生は第二次性徴期の特徴の一つとして友達から褒められ，評価されることを求めていることが分かっている。この集計結果を生徒はどう受け止めるのか興味を持ったので，授業でその結果を紹介することにした。すると，紹介された生徒は大変喜び，

どの学級も盛り上がった。後日，この取り組みについてアンケートを取ったところ「とてもよかった」が 63.7％で，「よかった」と合わせると 90％以上の生徒が高い評価をしていた。このことから，友達から褒められるなどの良好な結びつきは思春期の子どもにとって重要だと感じた。

６．考察

本研究は，思春期の特徴を踏まえた授業改善により，中学生が美術科の学びの意義や価値を実感できることを明らかすることであった。思春期特有の「行動評価を気にする」「友人との結びつきが強くなる」「より長期的で抽象的な行動がとれるようになる」という特徴を踏まえた授業改善は，①成績・評価を気にせず学びに向える授業，②友達との結びつきを大切にした授業，③学習の意味が分かる授業，に改善のポイントを絞った。授業後，1年の時にも筆者の授業を受けた彼らに対し，今回の授業改善をどう感じたのかを知るため 146 名にアンケートを実施した。その結果，「よくなった」「とてもよくなった」が合わせて 61.6％を占め，半数以上の生徒が改善したと感じていた。38.4％の生徒の「どちらでもない」の答えは，「どちらもよかった」「覚えていない」等が多かった（図７）。

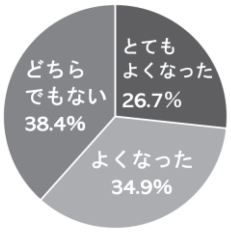


図７　酒井先生の指導は
１年と３年で変わりましたか？

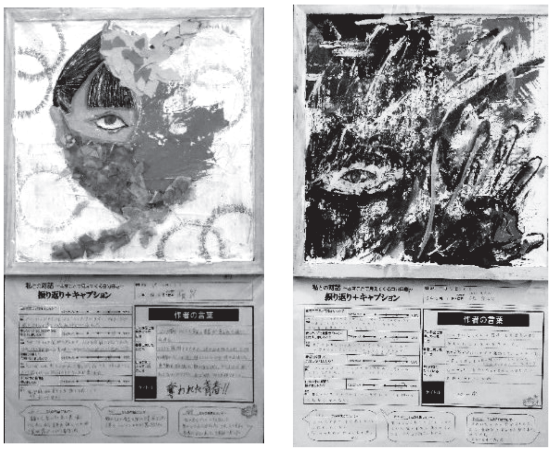


図８　授業改善で制作された作品例

自由記述にあった「途中でも，間違えてしまっても，色々な捉え方で受け止めて評価をしてくれている感じがして，授業を受けているうえでの安心感がすごいと思ったから」は授業改善の①に対応し，「先生の指導を通して，自分と対話したり人と交流して考え方の視点を増やすことができたので良くなったと思いました」は②に対応，「作品に視点を集中して取り組めるようになって，この先の進め方などの見通しも立てながら授業を進めたりできるようになった」は③に対応していると捉えられる。このことから，思春期の特徴を踏まえた授業改善はおおむねうまくいったといえるだろう（図８）。

７．今後の研究に向けて

これまでの筆者は理解ある指導者だったとは言えず，今回の研究によりようやく生徒自身が美術の学びに価値や意義を見出すような授業改善の取り組みができたように思う。特に，ライブドローイングには生徒が自分自身で表現力を引き出すことができる教材としての可能性を感じているため，研究の歩みを止めず授業者としての資質の向上を目指したい。

引用文献

Johnstone, William, 1941, *Child Art to Man Art,* London: Macmillan.　（周郷博・熊谷泰子共訳，1958，『思春期の美術：子どもの美術から大人の美術へ』黎明書房．）

笠井清登，2015，「創造人間科学としての思春期学」長谷川寿一監修『思春期学』東京大学出版会，1-17.

小池進介，2015，「脳の思春期発達」長谷川寿一監修『思春期学』東京大学出版会，131-144.

文部科学省，2018，『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　美術編』日本文教出版.